



## 幼児期の水遊びと

### 大人になってからと

津守 真

三歳のG夫は、私の頭の上に砂をひとつまみのせて、ボーンと言った。私が頭を振って砂を落とすとケラケラ笑った。

自分で遊ぶようになったG夫は、水と砂を好んだ。水を何度も汲みに行き、砂場に流す。水と砂がぐにゃぐにゃになったところに手をいれ、握ったり放したりかきまわしたりするのを楽しんだ。どちらかと言うと観念的に自分の世界に閉じこもりがちなこの子は、自分の手で直接に物質にふれる体験を欲しているように思われた。それか



ら、手に攪んだ砂を砂場の外に向かって投げた。それは投げるといふよりも手に持ったものを取えて手放すこつを練習しているように見えた。憑かれたように、G夫は毎日それをつづけた。『保育の体験と思索』に記したように、その遊びをしている間に、この子が悩まされていた便秘がなくなった。

同じ時に家庭指導グループに来ていたN男も水を好んだ。

ある日、泣き声を出して私にくっついた。私が背中におぶって歩くと、柱にしがみついて、私が歩く方向に行こうとしなかった。ふと私の背中からおりて、引き出しから絵の具をだし、黒色の絵の具を筆につけて紙に人の顔を描いた。それから絵本の表紙の人形の絵を黒色で塗りつぶした。いま描いたのは「人」なのだよと強調しているように思えた。それからヤカンに黒色の水をつくり、コップにあげた。コップとヤカンはいつもきちんとして置かれた。水が床にこぼれて床が水びたしになるので、私はそれを拭くのに忙しかった。N男は毎回この遊びを繰り返した。帰りに母親が入って来て、黒い水があちこちにこぼれているのを見ると、「あ、N男かしら、よく遊んだのね」と言った。私は母親のことばに感心した。N男は家でも同じような遊びをしていることは明らかだった。

しばらく後、N男は、家で「人の形」を紙に描き（母親はそれを「こけし」と呼ん



だ、それを黒い水につけ、近所の川に流しにいったことを母親は話してくれた。近所の人も、この子は口をきかないから何も分からないのかと思っていたら、「くけし」を川に流しに行くなんてすごいと、この子に対する評価が高くなったとのことであつた。私共はときどきこういう不思議な遊びに出会う。それが何なのか、そのときに分かり難いが、この子の心にはいろいろの思いがあつたことは確かである。そして、母親もこのことを心にとめ、肯定して私に話してくれたのだった。

これらのことからちょうど二十年たった。

地域の学校に行き、立派な青年になったG夫は、ホテルで料理人の修行中である。N男も地域の学校を卒業してクリーニング店に勤め、主人に気に入られて、毎日愉快に働いているという。多くのことがこの間に起こっているから、幼児期と大人になってからとを因果論で結ぶことは放棄せねばならない。しかし、水と砂に手を入れてこねるのを好んでいたG夫が働き場として料理を選び、人を描いて黒い水につけ川に流しに行ったN男が、汚れを洗い落とすクリーニング店で働いているのを考え合わせると、成る程とうなづける。そしていまは大人になったこの子たちへの親しみが一層増してくる。もしも大人になったこの子たちと再び生活をともにする機会があれば（そんなことはあり得ないことだが）、幼児期に付き合った者は、全人的関心と洞察を



もってその子と前進的に付き合えるに違いない。

ひるがえって、幼児期のことをもう一度考えると、あのときに私は水で遊ぶことを肯定的にみて、それを十分にやらせてあげたのがよかったのだと思う。それがなかったならば、二十年後の生活は違っていただろう。当時私は水をそんなにやらせることに自分自身ためらいがあったし、実際そういう批判を受けていた。それに応えるのは、週に一日だけではなく、毎日子どもとかかわる生活をしたと思うようになっていた。

前回に記したH子と、右に記したG夫、N男と三人、同じ時期に家庭指導グループに来ていた。私がこの子たちの水と取り組んで保育をしていた最中、何回も事務局から呼ばれ、愛育養護学校の将来について相談を受けた。私はその緊張感のなかで水遊びとつきあっていた。私が専任校長になる数年前である。